倫風宏話

復習「捨て育て」

上廣榮治

世間には、わが会の提唱する「捨て育て」は「幼児虐待だ」と非難する人たちがいるという話を、ある会友さんから聞いて驚きました。「捨て育て」という言葉を、捨て子や親の責任放棄の勧めだと誤解したのでしょう。言葉はその指している内容とは関係なしに、独り歩きして曲解されがちなものではあります。それにしても、ここまで曲解されるとは、唖然としました。唖然としてから、ふと不安になってきました。

これが単なる誤解や為にする言いがかりだとしても、煙が立つところに火はなかっただろうか、という心配です。そこで、まさか「子育てを犠牲にしても、お役を務めなさい。普及に出なさい。〈捨て育て〉ですよ」などという指導がなされている例はないでしょうねと、その会友さんにうかがってみました。ところが答えは、絶対にないとは自信を持って言い切れません、わかりません、というものでした。

万が一にも一部の会友が、無責任な世間と同じレベルで曲解して、そんな誤った指導をしているとしたら、ただちに改めていただくだけでなく、会友にまで誤解を招く「捨て育て」という言葉そのものも、再考しな

ければならなくなるかもしれないほどの事態です。

そもそも「捨て育て」の真意は、親の私情にかられた子育てをしてはならない、「親の勝手」を子どもに押し付けてはいけない、大自然の摂理のままに自然に育てよ、というものです。

例えば甘やかしです。親にとって子どもがかわいいのは当然です。だからといって、甘やかし放題にするのは「親の勝手」というものです。甘やかして、親が子どもの言いなりになれば、子どもは自分が一番偉いと思い込むようになるでしょう。ちょうど、中国の一人っ子政策で、わがまま放題に育てられた、〝小皇帝〟と呼ばれる困った子どもたちのようにです。やがては彼らは、誰からも嫌われる自分勝手な人間に成り下がってしまうかもしれないのです。

子どもを大事にするあまり、風にも当てぬように庇う過保護も同じく「親の勝手」です。子どもが望んだことではありません。何もかも、親が子どもに代わってしてやれば、自分では何一つ判断できないひ弱で頼りない人間に育ってしまいます。

反対に、厳格すぎるしつけや教育を子どもに押し付ける親がいます。何から何まで子どもに指図する過干渉の親もいます。しかし、そうした強制に対する反発から、子どもが非行に走る例は少なくありません。

家庭をかえりみない親、子どもに関心がない親の場合もまた、「親の勝手」を子どもに押し付けていることになります。子どもに向けるべき関心を、自分の勝手で他に振り向けているからです。関心を持たれていない、愛されていないと感じた子は、情緒が不安定になり、常軌を逸した行動に走りがちです。

幼児虐待などという信じられない行為も、「親の勝手」を子どもに押し付けている極端な事例です。子どもに暴力を振るうことで憤懣や鬱憤を晴らそうとする、これを「親の勝手」と言わずして、何というのでしょうか。親に愛されないばかりか、手ひどい暴力を振るわれ続けた子どもの心が、どのような壊れ方をするも

のか、想像するだけでも辛いことです。

こう考えてくると、子育てで排除すべきことが見えてきます。「親の勝手」です。親の勝手を「捨て」、大自然の摂理のままに子どもを自然に「育て」よう。これが「捨て育て」という言葉の指すところです。

では、子育てにおいて守るべき「大自然の摂理」とは何でしょう。それは、動物たちがどのようにして子を産み育てるかを見れば一目瞭然です。動物たちはわが身を犠牲にしても嬰児を守り、子が自立して生きていく力を獲得するまで見守ります。その間の親の気遣いと行動を人間の言葉に置き換えれば、「愛情」というほかはありません。つまり、子育てにおける「大自然の摂理」とは、惜しみなく子に注がれる愛情のことなのです。

すなわち「捨て育て」とは、過保護や過干渉、無関心など不自然な親の勝手を「捨て」て、大いなる愛情で子どもを「育む」、優しく賢い子育てのことなのです。

かつて本誌で、不登校の子どもを立ち直らせるため、いったん子どものことを念頭から去って、倫理の実践に邁進された会友の実践例が紹介されたことがありました。

そのお母さんに子どもへの愛情がなかったのでは決してありません。むしろ立派に育ってほしいと誰よりも強く願ったのです。だからこそ、「学校へ行きなさい」「勉強しなさい」と口やかましく強制してはいけない、親の勝手な思いを子どもに押し付けてはいけないと悟ったのです。心が傷ついた子どもには、何を強制しても、一層傷を深くするだけだ。強制すれば子どもが生まれながらに持っている生きる力を奪ってしまう。そのことを大自然の摂理、すなわち子に対する親の愛情によって、教えられたのでしょう。

そこで、うるさく干渉することをやめ、子どもにはただ大きな愛情を注ぐだけにしようと決意して、自分自身も大自然の摂理のままに生きる実践に入ったのです。この「捨て育て」は見事に成功しました。子ども

自身が親の真摯に生きる姿を見て、わが振りを直すようになり、朝起会にも参加して、積極的に生きる力を発揮しはじめたのです。

もしこれをもって、「捨て育てとは、子どもを放ったらかしにして活動に励むことだ」と非難する人がいたとしたら、その人は、この親の子どもに対する強い愛情をまったく見落としているのです。

もうおわかりのことと思います。「捨て育て」の核心は、「親の勝手の排除」であり、「強制の排除」です。そして実は、わが会が最も大切にする態度もまた、「強制をしない、自発性を大切にする」というものなのです。すべての実践は強制によるのでなく、「自発的」に行なわれてはじめて、効果が上がるものだからです。

わが会の会友になろうというほどの方であれば、誰もが積極的により善い人生を自ら拓こうと希望しているはずです。子育てについて言えば、誰もが大自然の摂理のままに子どもを愛し、その健やかな成長を願っているはずです。とすれば、何事かをなそうとするときに、まず優先されるのが子どもであり、家族であるという思いは、誰もが「自然に」身につけているに違いないのです。

そうした人たちに対して、もしも万が一、「子育てよりもお役を務めなさい。普及に出なさい。〈捨て育て〉ですよ」などという短絡的な指導をするようなことがあったとすれば、それは「自発的」な実践とは無縁の「強制」であると言わざるを得ないでしょう。強制された人の心は次第に会から離れていってしまうことでしょう。

創立六十周年のもの前の年です。すべての実践は自発的で自主的なものであるという創建当初の基本が忘れられてはいないかどうか。「目上の人にはハイですよ」と服従を強いる権威主義や、実績数字を上げることにだけとらわれた「強制」が、会の中に芽生えてはいないかどうか。もの前の徹底的な検証が必要かもしれないと思うのですが、いかがでしょうか。杞憂であれば幸いです。